

## 歌語「縹の帯」の変容

藏 中 さやか

The Transformation of Words in the Poem '*Hanada no obi*'

KURANAKA Sayaka

---

神戸女学院大学 文学部 総合文化学科 教授

連絡先：藏中さやか 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学文学部総合文化学科  
kuranaka@mail.kobe-c.ac.jp

## Summary

I investigated '*Hanada no obi*', a poem with words generated partially from the lyrics of '*Saibara*', which is a song in the *Heian* era, and its melody was made in line with the tunes of *Gagaku*.

There have been preliminary studies which focused on and after the medieval period, but did not discuss in detail examples of their application in the central period of poem history. In this paper, I collected and analyzed examples of their application during the years 1000-1200 to point out the changes, their background and the underlying reasons.

At the beginning, the words implied a sense of difference between the sexes, and their usage is limited to situations where females give to males clothes and *obis*, and they were found in the *waka* from the former to the latter. This study, however, clarified that such tendencies disappeared by the end of the *Heian* era.

**Keywords:** the *Heian* era, poetry words, *Saibara*, *Hanada no obi*, female words

## 要 旨

本稿では、「石川」という催馬楽（平安時代に雅楽の曲調にあてはめて謡われた歌謡）の歌詞の一部から生まれた歌語である「縹の帯」について検討し、平安中期から平安末期に至る同語の意味の変容について論じる。

同語については、中世以降に重点を置く先行研究があるが、その詠歌史の初発となる時期の用例についてはこれまで詳論されていない。本稿は1000年ごろから1200年ごろまでの和歌中の用例を集めてその詠作事情を検討し、その変容が1100年代から起こることを指摘するとともに、その変化がもたらされた背景を考えてみようとするものである。関連して、歌学書における同語への言及と『源氏物語』紅葉の賀巻と花の宴巻の作中歌及び発話中の表現の意図するところにも考察を加えた。

当初、同語は性差感覚を内包しており、その使用は、女性が男性に装束や帯を贈る、届けるという状況に限定され、女性が男性に対して詠いかける和歌に用いられていた。しかし、その傾向は平安末期までに次第に失われていき、中世以降、「縹」という色の特性である変わりやすさに結びついて用いられるようになっていったと考えられることを明らかにした。

**キーワード：**平安、歌語、催馬楽、縹の帯、女性語

## はじめに

近現代の女性語の問題を取りあげる研究には中村桃子・金水敏らの研究があり、関連する書籍も多い。古典文学研究の側から特に歌語のジェンダー区分をとりあげ再三にわたり論じているのは近藤みゆきである。「和歌とジェンダー」（『国文学 解釈と教材の研究』45-5 2000年）、「古今集のことばの型—言語表象とジェンダー—」（国文学研究資料館編『ジェンダーの生成』臨川書店2002年）、「男と女の「ことば」の行方—ジェンダーから見た『源氏物語』の和歌—」（『源氏研究』9 2004年）等に加え、該当語を一覧する「古今和歌集男性特有表現一覧（改訂版）—N-gram 分析による古典研究のこれまでとこれから—」（『実践國文學』80 2011年）がある。

和歌を社会・制度を反映したテキストとして扱う近藤は、「王朝期における歌の「ことば」の性差感覚の標準・基準<sup>1</sup>」を導き出すことに成果を挙げている。例えば、『能因歌枕』の「夏虫とは女によりて身をいたづらになす物にたとふ」を引き「男性が、男性自身の恋をたとえるのが「夏虫」の喩の本義であった」ことを述べ、また「計量結果として抽出されてくる女性中心のことば」として「かれゆく」「言はましものを」を示す。これらは和歌に使用される語に確かにジェンダー規範が存在したことを述べるものと言えよう。さらに『源氏物語』ではそういった規範を逸脱するさまを描くことで効果的に登場人物像がかたちづくられている点も指摘している。

これらの指摘を前提とした場合、語に付着する特定のジェンダーのイメージは、どこまでその規範性を保持し得るのかという疑問が浮かぶ。ことばは時の流れの中でゆらぎを生じ、意味や語型に変化を起こす。現代から古語の世界を覗きみる我々にはそれらは包括されてしまい、語が使用された時間は「いにしへ」や「むかし」という過去の時間の大きな一括りの中に封じ込められてしまう。が、語が用いられた時点に立ち返って考えてみることも必要であろう。

---

1 「和歌とジェンダー」（『国文学 解釈と教材の研究』45-5 2000年）より引用。続く近藤の論もこれによる。

本稿では、「縹の帯」という催馬楽<sup>2</sup>由来の歌語表現をとりあげる<sup>3</sup>。同語については、中世以降の用例に注視した先行研究がある<sup>4</sup>。その中では「縹色が花色と同じとする認識、あるいは縹色がうつろいやすい色とする認識は、中世に下るまで現れない」、「恐らく長持ちする実用的な染めであった縹色が、催馬楽の「中絶ゆ」に引かれて、和歌の中でははかないイメージを付加されてゆき、中世になると縹色が月草で染めた花色と同一視され、あせやすい色として把握されるようになっていった」といった見解が導かれている。しかしその詠歌史の初発期の用例については詳論されていない。本稿では初発期から中世に至る用例を辿りつつその用いられ方の変化を分析し、当初、同語に内包されていた性差感覚が平安末期までに失われていったと考えられることを明らかにする。

なお「縹」とは、薄い青色（空色）、のちには藍を用いて染めたものをも言い、広く青系統の色を指す語である。「帯」は装束を結び止めるものであるが、男女ともに用いた。特に男性の場合は、束帯という正式装束に用いる石帯、革帯を指す場合がある。

## —

催馬楽「石川」に由来する歌語である「縹の帯」は、その使用が『源氏物語』紅葉賀、花の宴巻に見えることから、催馬楽由来の歌語として注目され、『源氏物語』研究の側から一定の研究が集積されている。一条兼良以来の「石川」の解釈を含むその研究史のまとめは、植木朝子「催馬楽「石川」小考—源内侍・朧月夜をめぐって—」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識』22 2002年。以下では植

---

2 催馬楽とは雅楽の曲調に上代の民謡や流行の歌謡を当てはめたもので、『日本三代実録』貞観元年（859）十月二三日条が文献上の初出。一条天皇（在位986～1011）の時代前後には盛んで、和琴・箏・琵琶・笛・笙・箏箏を伴奏楽器として、貴族の饗宴でしばしば演奏された。平安時代後期に書写された古譜である鍋島家本『催馬楽』には律二五曲、呂三六曲、合計六一曲が、天治本『催馬楽抄』には律一六曲、呂二五曲が収められている。

3 植木朝子「催馬楽と和歌」（『国語国文』74-1 2005年）参照。

4 植木朝子「「縹の帯」小考—催馬楽から小歌へ—」（『日本歌謡研究』42 2002年）。

木論文と称する)に詳しい。

ここでは植木論文に導かれる形で「石川」を巡る基本的な理解を示しておく。

平安後期の譜である天治本を仮名表記に改め濁点を付す形で、「石川」の歌詞を三段に分割して示すと次のようになる。

いしかはの こまうどに おびをとられて からきくいする

……《第一段》

いかなる いかなるおびぞ はなだのおびの なかはたいれなるか

……《第二段》

かやるか あやるか なかはたいれたるか……《第三段》

漢字表記も含めて再掲すると「石川の 高麗人に 帯を取られて からき悔いする」で始まり、「いかなる いかなる帯ぞ 縹の帯の 中はたいれなるか」という問いに、「かやるか あやるか 中はたいれたるか」と答える形式が明確になる。これまで種々の解釈がなされてきたことは植木論文が一覧する通りである。大意を示せば、第一段は高麗という異国の人に帯を取られた人物が辛い心情で後悔するという意である。続く第二段は第一段話主に問う形である。第三段は意味不詳ではあるが、第二段を受けた「二人の仲は切れちゃったのかい」といった囃子詞と考えられる。「中はたいれたるか」の箇所は鍋島家本「奈可波太伊礼奈留可」、同本所載の異説「奈可波太以礼太留可」、天治本「名加波太衣太留」、仁智要録「ナカハタエタル」、三五要録「ナカハエタル」、同「ナカハタエタル」等、表記に揺れがある<sup>5</sup>。小野恭靖「催馬楽出自の歌ことば—歌枕・地名を中心として—」(小町谷照彦・三角洋一責任編集『歌ことばの歴史』笠間書院 1998年)が、意味不明とされる「中はたいれなるか」について「「中は絶えたるか」の意の歌いくせによる表記の可能性」を指摘するように、ここには「仲絶え」を示す表現が入るものと考えられる。

問答調の掛け合いの歌である「石川」の主情は、第一段の関係を持ったことを後悔する人の心にある。どのような状態を指すのか現代人には不分明ではあ

---

5 藤原茂樹編『催馬楽研究』(笠間書院 2011年)参照。

るが、帯の途中か中身が切れたらしき「縹の帯の中が絶えた」という表現に、「二人の仲が絶えた」という意を重ね合わせて解き、「縹の帯」→「仲絶え」という連想による歌ことばが生まれたのである。

植木論文は「これまでの注釈史において言及がある場合はすべて、帯を取られたのは女であるとされてきた」とした上で、帯を取られたと歌う者を男とする新解釈を示す。試訳「石川の高麗人に帯を取られて（恋愛関係を結んで）、ひどく後悔することよ。どんな、どんな帯なんだい、縹色で真ん中が切れているやつかい。そうなのかい、そうなのかい、真ん中が切れているのかい（高麗人との仲もぷつつきれたのかい）」を提示し、帯をとるのは異国出身の女、帯をとられるのは男と解する。

「石川」が催馬楽として謡われた当時の解釈をどう考えるのかという点も問題の片隅に置きながら、次節では物語作中例ではなく実詠としての和歌用例を検討していきたい。「縹の帯」には催馬楽が奏され『源氏物語』が書かれたのと同じころに実際の場に即して使用された例がある。同語はちょうどこの時期に詠まれ始めた歌語なのである。

## 二

「帯」は「解く」「ほどく」「結ぶ」「結ふ」といった動作と結びつき、男女の関係性を表す語として機能する。その中で、催馬楽由来の歌語「縹の帯」の用例については、注3に掲出した植木朝子「「縹の帯」小考—催馬楽から小歌へ—」が、既に一覧するところである。中世に重点を置く植木の論は、鎌倉期以降に、変色しやすいという色の特性に着目した「石河やははに契や結び置きし花田の帯のうつりやすさは」（続後拾遺集・恋三・八七九・後鳥羽院下野）等の例が出現することを指摘し、仲絶えと心変わりという親和性の高い二要素を結びつけながら同語が用いられたことを明確に述べる。

しかし、その初発期については平安期の例として全六首を掲げ「平安期に詠まれた和歌は、ほとんどの場合、中が絶えるという点のみをとりあげている」という指摘と色の取りあげ方への言及がなされるに留まり、細部検討の余地が

残されている。本節では、数は少ないながらも確かに存在する同語が和歌に使用された初期の用例に立ち戻り、その意味用法について考えてみたい。

「縹」という色と「帯」が結びつく最も古い例は、奈良時代の『万葉集』長歌（巻十六、旧番号三七九一）の一節にある「水縹の絹帯」という表現である。この歌は、竹取翁が、春三月、野歩き中に九人の仙女に出会った際の長反歌三首のうちの長歌である。

…<sup>イサム</sup>禁尾<sup>ヲトメガ</sup>跡女蚊<sup>ホノキキテ</sup> 勢髯聞而<sup>ワレニ</sup> 我丹所来為<sup>ソコシ</sup> 水縹<sup>ミハナダノ</sup> 絹帯尾引<sup>ヲヒキ</sup> 帯成<sup>ナレル</sup> 韓帶丹<sup>ニ</sup>  
<sup>トラシ</sup>取為…

若き日の竹取翁が女性から受け取ったものが絹の水縹の帯であった。女性から男性に贈るものとして帯があったという点、注目したい。ここでは、その材質が絹であることから日常的なものではなく特別の品であったかと考えられる<sup>6</sup>が、特にその色に寓意が籠められているようには読み取れない。

この後、「水縹」を含め「縹」が帯とともに使用される例は『古今集』、『古今六帖』等に見えず、一気に平安最盛期（1000年前後）まで時代は下る。以下、延べ用例数13例を順次検討してみたい。

催馬楽由来の歌語「縹の帯」の詠歌史を紐解くと、『源氏物語』が書かれた時代に重なる赤染衛門、和泉式部のころがその初発期になることがわかる。

匡衡と赤染衛門の贈答を『匡衡集』<sup>7</sup>により示すと次の通りである。

女のもとにしやうぞくせさせ侍りしに、ゑずることありておともせぬ  
に、しいでておこすとて、帯にむすびつけたるものに  
むすぶともとくともなくてなかつた花田の帯の恋はいかがする（七五）  
とあるかへし  
むすべとかとけとか帯のゆふがたをまつにあふぎの風ぞ涼しき（七六）

6 伊藤博『萬葉集釋注 八』（集英社 1998年）は「…禁娘子が<sup>きへをとめ</sup>ほの聞きて 我れにおこせし 水縹の 絹の帯を 引き帯なす 韓帯に取らし…」と訓み、「禁娘子が噂に聞いて負けじとこの私に贈り届けてよこした薄水色の絹帯、そいつを付け紐風の韓帯にとご採用」と解す。

7 『新編国歌大観』の内、第七卷所収本による。



同じ贈答は妻であった赤染衛門の家集である『赤染衛門集』には次のように載る。

うらむべきことやありけん、さうすくせさせし人のひさしくおともせ  
ぬに、しくして帯にむすびつけてやりし  
結ぶともとくともなくて中たゆるはなだの帯のこひはいかがする（一一〇）  
かへし、あふぎなどぐしたればにや  
むすべとか解けとか帯のゆふかたをまつにあふぎの風ぞすずしき（一一一）  
又返し

とくとまた扇の風のいそがぬにそらをわれなに結びめやなぞ（一一二）

夫婦関係にあった二人がそれぞれに表現する詠作事情は一致している。装束の支度を依頼した夫は、怨みに思うことが起きて連絡もしないでいたという状況を述べるが、それを妻は、恨むようなことがあったのか長らく連絡もない、と表現する。そのような夫に対して依頼された装束を届ける妻がその帯に付けたものが「むすぶとも」の和歌であり、「中たゆる縹の帯の恋」が二人の現状である。「むすべとか」の和歌が夫から返されるが、これは装束に添えた扇から発想したものかと妻は想像している。『大和物語』九一段にも見えるように、当時、「怨歌行」で知られた斑婕妤に由来して、男女間で扇を贈ることは忌むことでもあった。扇が「飽く」に通じ秋風が吹けば捨てられるものであったからで、『和漢朗詠集』夏部の「納涼」に入る「斑婕妤團雪之扇」（一六二・匡衡）もこれを典拠とする。女性が男性に忘れ去れることを象徴する扇ではあるが、夫はそのことを特に取り立てることもなく扇をとりなして「やれ結べや解けやと、帯を結ぶ方法のことを言いますが、夕方を待つとあなたとわたしが「逢ふ」ではありませんが、扇（あふぎ）の風が涼しいことよ」と自分の夕刻の訪れをほのめかしなだめる<sup>8</sup>。それに対して妻はあなたのそら言はあてにならないと返信する。ことばとものの往還の中で機能する和歌のはたらきが顕著な一組の

8 関根慶子『赤染衛門集全釈』（風間書房 1986年）は和歌後半を「夕方涼しくなるのをまっておあいしに行きますが、暑い折扇を添えて送って下さって涼しくうれしいことです」と解する。

贈答歌で、両者ともに催馬楽「石川」由来の歌語「縹の帯」を理解した上でやりとりをしている。繰り返される「結ぶ」「解く」は帯のことではあるが、二人の仲そのものでもある。「縹の帯」は「仲絶え」を響かせながら女性側から詠み出され、しかも女性が男性のために新調した帯を届けるという帯そのものが関連する場で用いられていることがわかる。

和泉式部には、『後拾遺集』恋三の

をとこにわすられてさうぞくつつみておくりはべりけるにかはの帯に  
むすびつけはべりける

なきながすなみだにたへでたえぬればはなだの帯の心地こそすれ（七五七）

（和泉式部続集・二〇八にも入集。詞書は「装束どもつつみておく、革の帯にかきつく」）

がある。男性に忘れられた和泉式部が、その通って来なくなった男性の装束を送る時に石帯に結び付けた和歌である。ここでは、絶えてしまった二人の仲を「縹の帯」に託して表現するが、和歌の中心は「はなだの帯の心地こそすれ」にある<sup>9</sup>。後述する『奥義抄』はその心情を「辛き悔い」に重なるものとして読み解いたと考えられる。

また和泉式部には、もう一首、男性から帯が遣わされた際に同語を用いる和歌が『和泉式部続集』にある。

はなだの帯の所所かへりたるをきかへて、をとこのおこせたれば

なれぬればはなだの帯のかへるをもかへすかとのみおもほゆるかな（三四九）

「かへる」は色褪せるの意か、或いは帯自体の反るような状態を指すのか判然としない。小松登美他『和泉式部集全釈―続集篇―』（新装版 笠間書院 2012年）は、この一首を「長い事着たものだから、この水色の帯の色が自然とあせたのだけれど、なんだか妙にわざわざ色をあせさせたいに感じますわ。―長いこと連れ添って魅力もあせた古女房のわたしですもの、この帯が手許にもどって来た時、さては、あなたがわたしの文を送り返して来たのか、離婚宣言かと、ただもうぎっくりしましたのよ」と解釈する。「かへす」につ

9 拙稿「日本文学から一心を伝える和歌」（神戸女学院大学文学部総合文化学科監修、建石始編『日常を拓く知3 伝える』世界思想社 2014年）参照。

いては「この頃縁を絶つ決心の時は、先方からもらった恋文を一括して返す風習があった。それを言っているものと見て解した」と注が付くが、前後の脈絡無く恋文を持ち出し、帯を恋文かと思ったと解釈することには違和感を覚える。下句は「(反っくり返った状態の) 帯を返すのかとだけ思われることですよ (こんな縹の帯を送ってきて、馴れてしまった私たちは仲絶えですか)」といった意味ではなかろうか。あるいは「かへす」は「かへし染め」をする、すなわち染め返す、再び染めるといった意で、一首は、「わたしとあなたはすっかり馴れてしまったので、(仲絶えに結びつく) 縹の帯が色褪せるのも返す(元通りにする) のかとばかり思われることです」と、慣れ親しんでいる男女関係を思わせる詠みぶりと解することもできようか。歌意は難解であるが、男性が帯を和泉式部に届けてきたことを承けて詠じた和歌であることは間違いない。

これらは実際の帯を巡るやりとりとして詠じられたもので、当時、そのような折には、「石川」由来の「縹の帯」が想起されたことが窺え、またそのような実際の出来事なしには「縹の帯」は用いられない語であったことをも示している。催馬楽「石川」が奏でられていたころの和歌用例からは「縹の帯」は女性の心情や、男性の帯を受けとる、男性に帯を贈るという女性の行為と結びつくものであったと考えられ、恐らく、その背景には仲絶えを危惧する女が見え隠れするものとして解されていたのであろう。

『四条宮主殿集』にも例がある。同集の「女」は後冷泉天皇の皇后四条宮寛子(1050年入内、1127年崩)のもとに仕えた女性、主殿かと推定される。

秋ころ、ものへまかりけるをとこに、はなだの帯にかきつけて、あるところなる女のとらせたりし

つゆわけてあさたつ人のゆふ帯にとくことのみもおもふべきかな (二六)

返し、をとこ

とくといふはなだの帯のほどはただあさゆふつゆのおきてしのばん (二七)<sup>10</sup>  
出立する男性に饞別の品として贈った「縹の帯」に、貴男が帯を解くことだけ

---

10 久保木寿子『四条宮主殿集新注』(青簡舎 2011年)参照。

を心配し「疾く来<sup>こ</sup>」と思うという和歌を添えた女性は、自分の知らぬところで男性が帯を解くことを案じ、忘れられること、つまり仲絶えることを恐れ、男性は貴女のことを朝夕思うと応じている。

この例でも、女性は帯を贈る者で男性はその帯を受け取る者である。現実的な恋愛状況を映す詞書を伴う点に先の赤染衛門、和泉式部の和歌との共通性があり、「縹の帯」が、仲が絶えることを恐れる気持ち、女性の情感を形容することのできる語として理解されていたことが窺える。催馬楽「石川」を知る者はまた「帯を取られてからき悔いする」という関係を持ったことへの後悔も読み取っていた可能性がある。

さて、女性から男性へという実際の帯の受け渡しや帯を贈る女心とは無関係に使用する初例は、源俊頼の『散木奇歌集』の一首である。俊頼が、山城守という夫がある女性に思いを寄せたがまもなく人目をしのぶ恋に破れた男性に遣わした和歌で、男性から男性に届けられたという点でもこれまでとは様相を異にする。「縹の帯」という語の使用が新たな段階に入ったと考えられる。

山城守なりける人のめをある人忍びてもの申すときこえけるを、程もなくかれがれになりぬと聞きてつかはしける

石川やはなだの帯のなかたえば駒のわたりの人にかたらん（一二九八）  
「なかたえば」という仮定条件を伴うこの歌では、「石川やはなだの帯の」は序詞として「仲絶え」を導くものとして機能し、「縹の帯」と「仲絶え」が前面に押し出され両者が堅固な結びつきであることを浮かび上がらせる。仲が絶えたのなら駒のあたりの人（すなわち相手の女性の夫）にそのことを話しましょう、と冷やかし半分の和歌を送ってみせたのである。『拾遺集』雑下に所収される国章の次の和歌、

おとにきくこまの渡のうりつくりとなりかくなりなる心かな（五五七）  
でも知られるように、催馬楽「山城」<sup>11</sup>に由来して山城の狛の近辺は瓜作りの

---

11 「山城」の歌詞は次の通り。「山城の狛<sup>こま</sup>のわたりの瓜作り　ななよやらいしなやさいしなや　瓜作り瓜作りはれ瓜作り　我を欲しといふいかにせむ　ななよやらいしなやさいしなや　いかにせむいかにせむはれいかにせむ　なりやしなまし瓜立つまで

地として詠じられるところであった。この地を持ち出したのは、相手の女性の夫が山城守であったからであるが、「山城の狛」からの連想により「山城」のみならず「高麗人」の登場する催馬楽「石川」の歌詞までもが想起されたことがわかる。ここでは「かれがれにな」り「なかつたえ」たことを表現する修辭として「縹の帯」は用いられる。帯という実体は存在しないし、帯が恋仲にある女性から遣わされるものである、といった前提も喪失してしまっている。修辭技巧に重点をおき、催馬楽由来の語を巧みに操った一種の言葉遊びに主眼がおかれているのである。

男性が詠じた例は平安末期の『頼政集』にも確認できる。

うらめしく侍る女を夜もすがら恨み明して帰りて侍りけるに、いかに  
したりけるにか白き帯のつきてまうできたりしを返しつかはすとて

うきにさは中やたえまし色なくて花だの帯に思ひなしつつ (四五八)<sup>12</sup>

ついに一夜打ち解けることのなかった女の元から帰ったところ、どうしたことか女の白い帯が付いてきたのでそれを返す際に詠じた歌である。「辛くて、それでは（帯を取られて恋が中絶えとなった催馬楽「石川」のようにあなたは情のある様子を見せないの）私たちの関係はとだえとなりましょうか。（私が持ち帰った帯は）白色で色がなくてあなたの気持ちもなく、（それ故、その）白帯を縹色の帯と無理に思いながら」という男性の恨み節である。男性が図らずも持ち帰ることになった女性の帯を返すという詠作事情は、帯を取られた女性に男性が帯を返すが二人の間に男女関係は結ばれていない、というやや込み入った関係性の表出でもある。ここからは、仲絶えを恐れる女性が使用する語であった「縹の帯」を、あえて性を反転して男性が用いたという意図が窺えよう。また色に着目し、縹色の変色により恋心を詠うところは、これ以前の用例とは異なり、中世的用法の萌芽と見るべきであろう。俊頼の時代を経て、1100年代半ば以降には、「縹の帯」は男性でも用いることのできる詞となっていっ

---

に やらしいなやさいしなや 瓜立つま瓜立つまでに」。大木桃子「瓜の歌—催馬楽「山城」と和歌」（『語文研究』105 2008年）参照。

12 頼政集輪読会編『頼政集新注 中』（青簡舎 2014年）参照。

た、つまり固着的な女性イメージを伴った詞という認識が緩んでいっていたのであろう。

頼政との恋愛関係が指摘される小侍従の家集には次の例がある。

神楽に寄する恋

人ごころはなだの帯のさればこそかねて思ひしな<sup>(ママ)</sup>かたえらこは(一一五)<sup>13</sup>  
「あの人の心は縹の帯のよう（に色変わるもの）、だからこそ以前から思っていた仲絶えなのだ、これは」という意のこの歌は、題詠としての初例となる。生き生きとした状況を映す場から離れ、「縹の帯」が縹という色の褪色しやすさと関わって仲絶えと結びつき歌語としての固定的な意味を獲得していたことを示す用例と言えよう。

「縹の帯」は和歌の中に詠み込まれ始めたころ、つまり1000年頃には、女性から男性へという帯のやりとりを背景に、哀切な女の心情を映す語として使用されていた。しかし1100年代からは過渡期に入り、その後半、つまり平安末期には、中世に繋がる、色そのものに着目して使用される用例が発生し、色に由来する形で「仲絶え」が強く印象づけられる語になっていったと考えられる<sup>14</sup>。

### 三

本節では、当時の歌人の知識の程度を考える一つの材料として、歌学書類の記載をみてみたい。「縹の帯」に関する記述は、平安後半の1100年代半ばから

---

13 「三」に掲出する袖中抄所引古歌に類似する点は注意を要する。

14 これらの他に、「石川」に由来する「帯」を詠み込む例に、為忠家初度百首（1134年末ごろ）の「高麗笛」題に「帯とりしいしかはびとのふえのねにはやしのうたのきこゆなるかな」（七〇〇・為業）がある。また重家集には詞書に「前中納言師仲許より、無文玉帯やある、故三位のさだめてあらむ、かせといはれたりしかば、つかはすとてつつみがみにかきつけし」とある「むかしよりさしつたへしをわれがよになかたえぬるかいはの帯」（三三一）とこれに対する中納言の「返し」である「さりともとまちこころみよきみがよもさしもたえじをいしかはの帯」（三三二）がある。「故三位」とは重家父の顕輔を指し、父の遺品である無文玉帯の貸し借りを巡る1167年春ごろの贈答。ここでは父と同じ三位に至らぬ自身のために、その祖父顕季以来の流れが中断することを「なかたえ」と表現する。

現れる。ここでは鎌倉初期までに成立した歌学書の関連記事を概観する。

藤原清輔による『和歌初学抄』（『日本歌学大系』二）には次のようにある。

なかたゆる事には ハナダノ帯 クメヂノハシ ワスレミヅ ホシアヒ

なきながすなみだにたへでたえぬればはなだの帯のこゝちこそすれ

初学者向けの歌語用例辞典のような傾向を持つ同書は、『後拾遺集』の和泉式部歌を引き、「縹の帯」が仲絶えの喩えとして用いられることを提示している。同じように語レベルで指摘するのが、『八雲御抄』（『日本歌学大系』別巻三）である。同書には

帯 かはの。石の。布（六位）。はなだの（中絶事によむ物也。）。

とあり、「帯」の項目で取りあげ、「中絶事」が引き出される形になっている。

顕昭による『袖中抄』（『歌論歌学集成』四）には次のようにある。

○はなだの帯（291）

なき流す涙にたへで絶えぬればはなだの帯の心ちこそすれ

顕昭云、はなだの帯とは、催馬楽云、

いしかはの こまうどに 帯をとられて からきくいする いかなる

帯ぞ はなだの帯の なかはたいれたる

此歌を本にて、はなだの帯のなか絶ゆとは詠むなり。古歌云、

君がせしはなだの帯のなか絶えてさればぞいひし長からじとは

俊頼歌云、

石川やはなだの帯のなか絶えばこまのわたりの人にかたらむ

是は山城守なりける人のめを、ある人しのひて物申すと聞えけるを、ほどもなくかれへになりぬと聞きて遣はしけると云々。

ここでも催馬楽「石川」を引用し「此歌を本にて、はなだの帯のなか絶ゆとは詠むなり」とあり、出典未詳の古歌を引用し、当時、同語が「なか絶ゆ」を表す歌語として受容されていたことを述べる。

この他、催馬楽出自の歌ことばを解説する『六百番陳状』や催馬楽「石川」由来の語であることを示す『和歌色葉』『色葉和難集』等もあるが、いずれも、特に同語の使用性別やその心情について忖度していない。

「心」に触れるのは『奥義抄』（大東急文庫本）だけである。『後拾遺集』の和泉式部歌「なき流す涙にたへでたえぬれば縹の帯の心地こそすれ」への注文に次のようにある。

是は催馬楽の心也。

石川のこま人に帯をとられてからきくひするいかなる帯ぞ花だの帯の中はたひれたる（二二三）

といふ哥をよめり。

注文には「催馬楽の心也」とあり、単に語の出典として「石川」を指摘するのではなく、その情の核となる「からきくひする」と和泉式部の歌意とが合致することを指摘する。つまり、和泉式部という女性の「心地」こそが「こま人に帯をとられ」た人と重なるという読解である。ここでは「縹の帯」は、「仲絶え」の暗喩としてだけではなく、関係を持ったこと自体を後悔しつつ怨じる女の心情をも表すものと解される。この見方は、平安最盛期の女性による同語使用の実例に即したものであろう。「二」で仲が絶えることを恐れる女性たちの用例を見たが、この心情はそもそも関係を結んだということへの後悔に繋がるものである。『奥義抄』のころには同語は女の心情よりも「仲絶え」を導くものとして印象づけられていたかと思われるが、この『奥義抄』の解釈は、一五〇年ほど遡ってその詠作時点の用法に立ち戻り、「縹の帯」を解釈しようとしたものであったと考えられる<sup>15</sup>。

歌学書で学んだ歌人たちは、知識として、「縹の帯」の由来と同語が「仲絶え」という意になることを習得する。しかしその際には、女性のおこなった帯を贈る、届けるという行為との結びつきは伝えられなかった。唯一、そういった折の女性の心までも読み解いたのが『奥義抄』であったと言えよう。

#### 四

歌語「縹の帯」は、「帯」を届けること、つまり男性のために装束を整え、

---

15 嘉村雅江他「『奥義抄』「後拾遺集注」注釈Ⅰ」（『緑岡詞林』38 2013年）参照。



時にそれを届けるという女性の日常的な営みが寄り添って受容されていたものと考えられる。平安中期以降の和歌用例を見る限り、「縹の帯」は歌語として登場した時点においては、女性が男性に装束を届ける行為と強く結びつきこれに関わって用いられた語であった。この背景には当時の女性の役割がある。

女性が家政を取り仕切り、染色や縫製を含む衣服調整の役割を担う者であったことは既に多くの指摘がある。例えば『蜻蛉日記』<sup>16</sup>の複数の記事からは特に妻が夫のために準備するものであったことが理解される。ここでは、野中和孝「道綱母の財産相続形態―「女性と財産」ノート（一）」（『活水日文』38 1999年）に「仕立物の催促」としてまとめて掲出された用例から2、3の例を再掲しておく。尚、同氏が引用する河添房江「『蜻蛉日記』の歌・衣・性」（日本文学協会編『日本文学』45-5 1996年）の「夫の衣装を調えるのは、妻の役目というより『召人クラスの愛人には手の出せぬ妻の特権』であり、その時代の不安定な婚姻形態を持続させるための手段でもあった」という指摘にも留意したい。

・天徳元年（957）七月

七月になりて、相撲のころ、ふるきあたらしきを一くだりづつひき包みて、「これせさせたまへ」とてはあるものか。見るに目くるるこちぞする。古代の人は、「あないとほし。かしこには、えつかうまつらずこそはあらめ」「なま心ある人などさし集まりて、すずろはしや、えせで、わろからむをだにこそ聞かめ」などさだめて、返しやりつるもしるく、ここかしこになむもて散りてすると聞く。

「これを縫ってください」と依頼してくる夫に目のくらむ思いのする作者が描かれる。「古代の人」とは母であり、「正妻時姫のところではしてさしあげられないのであろう」という発言は、夫を巡る女達の役割や位置づけに関わるものとして装束の用意があったことを窺わせる。

---

16 以下の本節の作品引用本文はすべて『新編日本古典文学全集』（小学館）による。

・天禄元年（970）五月末

「小野宮の大臣かくれ給ひぬ」とて世は騒ぐ。ありありて、「世の中いと騒がしかなれば、つつしむとて、えものせぬなり。服になりぬるを、これらとくして」とはあるものか。いとあさましければ、「このごろ、ものする者ども、里にてなん」とて、返しつ。

ここでは「早くして」と依頼してきた服喪のための装束をそのまま返してしまう。

天禄二年（971）一月に「例のことわり、これらとしてかくして」と言ってきたことに対しても「いと憎くて、言ひ返しなどし」、この後、作者は夫の装束調整には関与しようとせず、二人の関係の変化を具体的に示すものとして装束調整という妻の役割があったことが如実に示される。

この他、女性が裁縫の腕前を問われたことは『源氏物語』帚木巻の「指喰ひの女」に関わる描写の「竜田姫と言はむにもつきなからず、織女の手にも劣るまじく、その方も具してうるさくなむはべりし」からも窺うことができる。また『枕草子』第九一段「ねたきもの」には、

とみの物縫ふに、かしこう縫ひつと思ふに針をひきぬきつれば、はやく尻を結ばざりけり。また、かへさまに縫ひたるも、いとねたし。

とあり、女性にとって裁縫が日常的なものであったことがわかる。『栄華物語』卷十九「御裳ぎ」の大宮（彰子）が姫宮（禎子内親王）への贈物を整える場面では、裁縫が「まめわざ」として女房たちがおこなう実用的な仕事として描写されている。

裁縫に関わる表現が多いことで知られるのは『落窪物語』であるが、例えば、畠山大二郎「『落窪物語』の裁縫—落窪の君の裁断行為を中心として—」（『中古文学』93 2014年）は作中表現からその実態をあぶり出してみせている。畠山の論は、「裁つ」と「縫ふ」の分業状況を指摘し物語内での人物関係を論じ、作品世界を構築するにあたって裁縫という営為がいかに効果的に用いられているかを示すものである。男性の衣服調整に関わる女性の在り方を論じる先行研究や用例に目配りしている点で、本節の参考となる。

このように、装束の調整は、主従関係においては仕える女房たちに、男女関係においては妻という立場にある女性に託された役割であった。装束を手元に置く人は男性のためにそれを用意する立場にある女性であり、それ故、装束のやりとりという行為を伴って用いられる「帯」は、それが装束を身体に結わえ付けるものという実用上の役割から男女の肉体的な関係を想像させるだけでなく、実際の婚姻関係もしくは男女関係を象徴するものでもあった。

「縹の帯」は当初はそのような女性の立場と結びついて「帯」にまつわる場において使用されていた語であった。やがて、その語が「仲絶え」を言い換える表現、修辞技巧として注目され使用されるにつれ、「帯」にまつわる場や実体としての「帯」を要しなくなった。そしてその女性性が急速に失い、中世以降は、色の変わりやすさと結びついた歌語表現として受容されることになっていった。

## 五

以上、平安中期以降の和歌中の実例に即して「縹の帯」について述べてきたが、最後に『源氏物語』の用例についても言及しておきたい。対照的な内容を持つとされる紅葉の賀巻と花の宴巻の双方に関連する表現が見えることは、「一」で述べた通りである。

源内侍を巡る源氏と頭中将を描く紅葉の賀巻では、①源氏が頭中将の帯をとる→②残された帯を源内侍が源氏に届ける→③源氏は頭中将にその帯を届ける、という順で、帯が三人の手に渡り、最終的に帯は持ち主である頭中将のところに戻る。

帯の行方が女性から男性へ、という流れになるのは②であるがそこでは和歌は詠まれない。また帯を取ったのは①の源氏であり、その源氏が③で帯を届ける、という交錯した関係が生じている。帯を届ける、という女の役割を源氏が負っている、とも言え、この場面は男女の役割分担が攪乱している点にこそ、その特徴がある。源氏の贈歌は

中絶えばかごとやおふとあやふさにはなだの帯を取りてだに見ず（九八）

であり、これに頭中將が答えた歌は

君にかく引き取られぬる帯なればかくて絶えぬる中とかこたむ（九九）である。

ここでは状況として源内侍が加わり、三人の関係性の中で二人の和歌が詠まれる。本稿で取りあげてきたような男女関係は三人には当てはまらない。源氏は帯をとり（「男」の役割）、帯を届け（「女」の役割）ており、その輻輳する状況こそが非日常でありおもしろいのである。頭中將の歌は、女性の立場で詠んだ和歌としても読解でき、その二重性も評価されるべきであろう。

一方花の宴巻では「扇ばかりをしるしにとりかへ」た源氏と朧月夜が描かれる。源氏と、朧月夜ではない女性とのやりとりである「扇をとられてからき目を見る」と「あやしくも様変へける高麗人かな」が催馬楽「石川」を踏まえた部分となる。

「石川」の場合は「帯」は取り替えたものではなく、ここでは「とりかへ」という行為自体が「石川」とは相違している。よって「あやしくも様変へける高麗人かな」の意は、「高麗人が（取り替えたのではなく）取ったのは（扇ではなく）帯である」という気持ちを籠めた発言ではなかったか。

この部分は、語の置換というレベルでの引用であり、仲絶えや女性の心情に結びつく「縹の帯」そのものの用法には直接関わらないと見るべきであろう。

『源氏物語』の表現に催馬楽由来の語が用いられることはしばしば指摘されたとおりである<sup>17</sup>。平安最盛期の催馬楽受容の一翼を担ったのが『源氏物語』であり、またこれらがあつたからこそ、以降の源氏受容の過程で源氏由来の歌語としても「縹の帯」は用例数が増加していったのであろう。平安期の和歌用例は本稿で取りあげたものが全てであるのに比して、中世以降は、用例数が増加し、小歌や『日光山縁起』等、幅広く使用されていく。

---

17 中田幸司『平安宮廷文学と歌謡』（笠間書院 2012年）等、参照。

## まとめ

催馬楽「石川」由来の歌語「縹の帯」は、当初、実際に男女の間で起こる帯の往還を想起させる語であった。帯そのものが取られ、あるいは返されるということから、取る、返すという動作そのものやそれに伴う動作主の身体性もイメージされたと考えられる。またその時の女性の感情は、「石川」の歌詞中の「からきくい」であり、同じく歌詞中の「なかはたえ」から男女の仲の途絶えという状況が喚起された。ここでは、縹色という色からの連想は後退している。同語は、平安最盛期には実際の帯を巡る場に関わって女性によって用いられた。それはその際の心情と状況に一致し、また共感する故であったのであろう。「縹の帯」は、実際の詠作の場で用いられ始めた時点では、女性から男性へ実際に帯を遣わす場面に関わって用いられることばであったのである。そしてその背景には、女性が男性の装束を調整する役目を負っていたという、家政をとりしきる者としての女性の位置づけがあった。

中世に至り、その規範性は薄れ限定は緩む。同語が歌語として流通し使用層が拡大するにつれ、縹という色自体の褪せやすいという特性から、心変わりや仲絶えを導く語として使用され、「縹の帯」は男女の別なく「仲絶え」を象徴的に表現する歌語として浸透していくことになった。

催馬楽として謡われた当時の「石川」の解釈を導くのは難しいが、本稿でおこなってきた平安期の和歌用例の分析からは、女性側の心情を謡うものとして人々に受容されていたものと考えられよう。

【付記】本稿における和歌引用は特に記したものの以外は『新編国歌大観』により、「帯」を漢字表記に統一した点を除き表記もこれによる。